

アジアとの“小さな”差異から探る、日本らしさ

藤原佳奈

私が APAF に参加したいと考えた理由は、日本でさまざまな舞台作品を観るたびに感じていた、拭いきれない違和感だった。

演劇という行為自体には惹かれるが、目の前に提示された作品、特に現代演劇の俳優の身体表現に納得できないことが多々あった。この違和感がどこから来ているのかを探るうち、(宮城さんが提起されていた問題意識ともつながるが) 日本の現代演劇の源流が西洋から輸入されたものをベースとした新劇にあることがひとつの原因ではないかと思いついた。

日本人とは何か? 私の生まれ育った土地でもっと素直にできる創作とは何か? と考えていたときに APAF を知り、「アジア」というキーワードに惹かれた。

私自身は作・演出家として演劇創作ユニットを立ち上げたばかりだ。演劇をやる上で強度のある、引力のある身体表現を追求したいという漠然とした目標はあるものの、それがどんなものなのかをまだ探っている段階である。

それは昨今の日本の現代演劇で流行しているような、たとえば「だらしのない身体」のような表現ではないし、西洋的な俳優訓練を受けた身体表現でもない。能や歌舞伎役者の伝統的な身体表現には強度を感じるが、それも違う。

今回、特に印象に残ったのはラウンドテーブルでの対話だった。もっと聞きたい、丸一日ラウンドテーブルでもいい、と感じるほど引き込まれた。

各国のアーティストの話聞き、「アジアの多くの国ではマルチカルチャーが当たり前だからこそ、自分の伝統に自覚的にならざるを得ない環境にいる」ということを改めて感じた。日本も歴史上、大陸文化から大きな影響を受けてきたが、自分は教科書レベルの知識としてそれを理解しているだけで、実感しているとは言えない。日本に対する自分の無知を恥ずかしく思うと同時に、自分自身の生まれやルーツを再認識し、振り返るきっかけにもなった。

また私は以前から、日本各地の地域に伝わる民俗芸能や踊りが大好きだった。そのため国際共同制作された作品を観るにあたっては、自然と、他のアジア各国で脈々と受け継がれてきた身体表現とはどんなものかということに興味を持った。

実際、共同制作された作品にはそこそこに西欧的な方法論や俳優教育とは異なる身体表現を見て取ることができた。ただし今回感じた「差異」を、国と国との文化の違いにまで一般化して

判断するのは時期尚早であると思う。たとえば台北の身聲劇場の役者たちがよく鍛錬されていたことは印象的だったが、それはあくまで一つの劇団の特長であって、台湾やアジアと日本との違いと言うにはまだ判断材料が足りない。近い文化圏との小さな差異から浮かび上がってくる「日本」を考えてみる上でも、今後はもっとアジアのさまざまなシアターを観てみたいと考えている。

APAFでの体験を経て、これまで日本の演劇が積み重ねてきたものをいったん脇に置き、自分の見せたい・見たいと感じる身体表現はどんなものか？ というシンプルな問いを追求してみたいという思いが強くなった。

今年の夏は全国の祭りを回り、地域に伝えられてきた伝統的な踊りを勉強してこようと考えている。たとえば富山の「こきりこ踊り」は一見シンプルな動きの繰り返しだが、とても魅力的だ。それは私にとって間違いなく「日本」を感じさせるとともに、時代を超える圧倒的なものをも感じさせる。

日本人らしい身体表現とはどのようなものか。「アジア」は日本人らしさ、その文化的・歴史的ルーツを映し出す鏡にもなり得る。APAFが今後、より多くの人にとって開かれたものになることを願っている。